

幸いな人生とは

[聖書] 詩編 1 編 1～6 節

いかに幸いなことか／神に逆らう者の計らいに従って歩まず

罪ある者の道にとどまらず／傲慢な者と共に座らず

主の教えを愛し／その教えを昼も夜も口ずさむ人。

その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び

葉もしおれることがない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす。

神に逆らう者はそうではない。彼は風に吹き飛ばされるもみ殻。

神に逆らう者は裁きに堪えず／罪ある者は神に従う人の集いに堪えない。

神に従う人の道を主は知っていてくださる。神に逆らう者の道は滅びに至る。

[序] 今年の前半を振り返り

早いもので7月になりました。1年の半分以上が過ぎてしまったのです。振り返りますと大事な出来事がありました。教会としましては3月14日の定期総会で教会規則・細則を改訂しました。また同じく3月28日に初代牧師小久保先生夫妻と長女信子さんに福島からお出でいただいて、昨年10月6日に召された故菊地敏明兄の記念式と追悼会を行いました。菊地兄はこのピアノの上に掲げられている詩編133編の書と共に、いつも一緒に礼拝して居られます。

また3月7日にはシンガポールの教会の大谷恵護牧師夫妻就任式に参列し、私自身安心して心に一区切りがつかしました。また1月と5月に二度中国を訪問し、バプテスト連盟として、在住日本人伝道に取り組むよう報告書を提出しました。今週の国外伝道専門委員会で小さな第一歩を踏み出していただけると期待しています。では後半の教会の歩みをどのように進めていくか、午後の信徒会でご相談したいものです。

さて聖書教育による学びは、7、8、9の三ヶ月は、詩編の中から13編を学びます。祈祷会・分級・礼拝で学びを深めて参りましょう。

[1] いかに幸いなことか

私たちキリスト教徒は、旧約聖書と新約聖書を併せて信仰の基準である経典と信じています。しかしイエス・キリストを救い主とは信じないユダヤ教徒は、旧約聖書のみを経典としています。旧約聖書は律法(モーセ五書)・歴史書・文学書・預言書の39巻から成り、新約聖書は福音書・歴史書・書簡・黙示書の27巻から成ります。3×9=27、全巻で39+27=66巻と覚えます。

150編ある詩編の冒頭の言葉はヘブル語で「アシュレー」(いかに幸いなことか)です。私たち夫婦が長らく仕えた札幌教会では、幼稚園、教会学校を基盤にして、地域の全ての住民が出入りする地域社会型教会(コミュニティーチャーチ)の形成を目指しました。その時幼稚園・教会学校の父

親たちと作ったのが、卒園児童を対象にした剣道場と、幼稚園・教会学校母親たちと作ったお母さんコーラスです。そして喜美子がアシュレーコールと名前をつけました。幸いコーラス「いかに幸いなことか」を喜びの歌声で響かせようというのです。剣道場は後継者が得られず閉鎖になりましたが、コーラスは今でも毎週金曜日午前に集まり、また発表演奏会を開いています。

アシュレー(いかに幸いなことか)——どのような人が幸いな人なのでしょう。

神さまの教えを無視せず、神さまに逆らわず、悪を行う協議に加わらない人です。誘われてフラフラと悪の道歩いてしまう。とんでもない道に入ったと立ち止まる。回りを見たら神をないがしろにする者たちが車座になっているので、自分もはまりこんで、座ってしまった。歩く、とどまる、座るとは、深みにはまっていく有様をたくみに表現している言葉です。

大相撲が野球賭博問題で大揺れです。琴光喜が野球賭博で1億円恐喝されていると週刊誌が書き立てた時は、まさかと週刊誌のセンセイショナリズムに眉をひそめたものですが、事実はその通りでした。最大の賭博常習犯は元関脇貴闘力の大嶽(おおたけ)親方。大横綱大鵬の娘婿となり、大鵬部屋を受継いで大嶽部屋を建ててもらいながら、賭博にのめりこんで離婚し、相撲協会から除名される破目になりました。その転落の軌跡は、何とも哀れで、愚かです。

ではどうしたら、悪の道に転落しないですむのでしょうか。「主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ」ことです。私は神学校へ入る前の1年間、目白ヶ丘教会の牧師館で熊野先生一家と一緒に生活させて頂きました。ある朝の食事の時です。私の座席の前の戸棚に、手の人指し指に糸を巻いた少女がウインクしている絵が貼られていました。私ははっとしてズボンの前ボタンを点検しました。

申命記6章6節以下にこう記されています。「今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰り返し教え、家に座っているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。更に、これをするしとして自分の手に結び、覚えとして額に付け、あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい。」

ズボンの前ボタンのはずれを、熊野夫人からよく注意されていました。「これをするしとして自分の手に結び」日曜学校の教材にあった絵なのでしょう。注意しなさいと、朝昼晩の食事のたびに私はその絵を見ては、注意する破目になりました。イスラエルの人たちは、主の教えを子供の時から繰り返し教えられ、座っている時も、歩いている時も、寝ている時、起きている時、常住坐臥、親から語り聞かされて、育つのです。それほどまでして、聖書の言葉、主の教えを教えられても、神に逆らう者の道に迷い出る者がいる。私たちは自分がそれほど誘惑に弱い者であることを、よくよく自覚しなければなりません。

[2] 身についてきたキリストの香り

1節に述べられている人は「神さまの教えを無視せず、神さまに逆らわず、悪を行う協議に加わら

ない人」と否定形の動詞で語られている人でした。2節では肯定形の動詞で語られている幸いな人です。「主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人」。起きている時も寝ている時も親から繰り返し語り聞かされて育った人たちです。主の言葉が自然に口に出てきたことでしょうか。主の教えを愛しているのです。嫌いなら、とっくに吐き出していたことでしょうか。み言葉が自然に身についてきているのではないのでしょうか。

最近私は嬉しい勲章をもらいました。私は自分の剣道修行のために、毎週木曜日に綾瀬の東京武道館で 10 時から 12 時半まで行なわれている剣道の女性教室に通っています。その師範をしている岡村八段から手紙を頂いたのです。先生は都立高校の校長を定年退職してから、第二の仕事に就かず、猛烈に稽古に励み、八段に合格されました。1 年 365 日の内 320 日稽古されたそうです。そして 3 年間努力して合格されたそうです。剣道連盟の派遣教師としてシンガポールに来られた時、私に八段試験を受けるように強く勧めて下さいました。自分は 20 回挑戦しているが、未だ合格しない。でも強くなってきた。「加藤さん、七段どまりでのん気になってはいけません」。

私は 35 才から子供相手に始めた剣道です。牧師業片手間の稽古で、60 才で七段になりました。上出来です。自分の健康維持のために楽しんでいれば良いと思っていました。しかしシンガポールでは私が皆のお手本なのです。私がのんびり楽しんでいては、剣道はその程度のものだと思いが思い込んでしまいます。もっと強くなろうと真剣に稽古に精進しなければ、良い手本とは言えない。そこで悔い改めて、八段試験に挑戦し始めたのでした。日本に帰国してから、岡村先生のもとに通い始めました。去年は年間 129 回しか稽古できませんでした。岡村先生の 320 回に比べると 200 回ほど少ない。これでは八段などととても無理です。でも自分なりに限られた条件のなかでベストを尽くして精進し、強くなっていこうと心に誓っています。

その岡村八段から手紙を頂いたのです。「前略：先生のご出席は、ご指導いただけるということだけでなく、存在が彼女達に勇気とやる気を起こさせていると、私は認識しております。私自身もその様に感じて激励されているというのが本心です。存在が生きる力を与えているような気がします。私も出来ればそうなりたいと思います。時には見かけられる狭量の宗教人ではなく、人間としての大きさの魅力です：後略」。私は自分がそのように良い影響を皆さんに与えて居り、5 才年下の師範からも評価されているとは、露だに思ってもいませんでした。驚きました。そして「主の教えを愛し、昼も夜も口ずさむ」うちに、イエスさまの言葉が、自然に身について、香りを漂わせているのかなと思いました。有り難いことです。勿体ないことです。牧師をしてきてよかった、いかに幸いな人生を送れていることだろうと感謝した次第です。

[結] 流れのほとりに植えられた木

「その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び、葉もしおれることがない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす。神に逆らう者はそうではない。彼は風に吹き飛ばされるもみ殻」。

神に逆らう者が風に吹き飛ばされるもみ殻に、そして主の教えを愛する人は流れのほとりに植えられた木に譬えられています。何と言う違いでしょうか。木というのは自分では動き回れませんが存在感がありますね。昨年教会の庭の桜を、迷った末に 2本切り倒しましたが、近所の方たちから淋しくなったと口々に言われました。

小学校の卒業式でよく歌われる「大きな木」。皆さんもご存知ですね。「小さな種から芽を出して、こんなに大きくなったのか 大きい木 大きい木 大きい木 10人で抱えても まだ手が届かない/雨の日 風の日 頑張っ てこんなに大きくなったのか 大きい木 大きい木 大きい木 静かに立っている 村中を見下ろして/ 百年 千年 ここにいてこんなに大きくなったのか 大きい木 大きい木 大きい木 まだまだ伸びていく 天にも届くまで」。雨の日風の日頑張っ て大きく成長し、静かに村中を見下ろしている木、まだまだ天を目指して成長し続けている木、小学校を卒業していく子供たちに、大きなメッセージを発信しています。木にはそのような存在感があるのです。

でも聖書に記されている木には、もっと豊かなメッセージが込められています。新約聖書の一番最後、ヨハネ黙示録 22 章をお開き下さい。世の終わりにキリストが再び来られて新天新地がもたらされ、輝かしい神の都が現れます。神の玉座からは水晶のように輝く命の水の川が流れ出て、その兩岸には命の木があり、年に 12 回毎月実をみのらせます。12 種類の違った実を稔らせると口語訳・新改訳は訳しています。そして木の葉は枯れることなく、諸国の民の病を治すと記されています。命の水の流れのほとりに植えられた木は、ただ立っているだけではなく、豊かな実、しかも毎月違った実をみのらせて、人々の命を豊かに養い、葉は涼しい木陰を作るだけでなく、薬用となって諸国の民の病を治すのです。存在感だけでなく、積極的に命を養い、病を癒す豊かな命の業に貢献するのです。私たちの人生も、周りの人の役に立ちながら自他ともどもに豊かに生きていけるとしたら、どんなに幸いなことでしょうか。

「その人のすることはすべて、繁栄をもたらす」。自分一人の繁栄ではなく、自他共々に繁栄して、いかに幸いなことかと感謝する人生をこそ送りたいものです。